

地域の会 9/29-30 福島視察感想

日にち	平成25年9月29日(日)～30日(月)
内 容	29日(日) 住民懇談会(いわき市生涯学習プラザ) 30日(月) 福島第一および第二原子力発電所視察
視察参加者	－委員－ 浅賀・新野・石坂(30日のみ)・桑原・佐藤・三宮・高橋(武) 高橋(優)・武本(和)・武本(昌)・千原・徳永・中原・前田 吉野 29日・・・14名 30日・・・15名 －オブザーバー－ ・資源エネルギー庁柏崎刈羽地域担当官事務所 橋場所長(29、30日) ・原子力規制庁柏崎刈羽原子力規制事務所 内藤所長(30日) ・東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所 地域共生総括グループ 杉山課長 椎貝副長 山本主任 (30日) －事務局－ 柏崎原子力広報センター 須田業務執行理事 石黒主事

- 29日は、いわき市生涯学習プラザにおいて、現在も福島県内で避難生活をされている被災者の方々7名と懇談会を実施し、発災当時の状況や震災から2年半が経過して今思うことなどについて話をうかがった。
- 30日は、福島第一および第二原子力発電所の視察を行い、第一では1から4号機建屋の状況や免震重要棟内の作業の様子などを、第二では3号機原子炉建屋内の状況などをそれぞれ確認した。
- 委員感想を以下にまとめた。

.....

【 懇談会について 】

〈委員〉

- ①最初はどのような雰囲気になるのか心配した面があったが、結果して、有意義な懇談会であった。原発立地地域の住民同士の意見・情報交換は重要であり、定期的に行なえば良いと感じた。
- ②原発事故当時は全く情報が無く、着の身着のまま避難された苦労は想像を絶するように思えた。適時適切に正確な情報を伝達することの重要性を再認識させられた。
- ③原発立地地域は国・事業者に次ぐ第三の加害者であるとの認識は衝撃的であり、胸に刻まれた。

〈委員〉

7名の方から貴重な体験談を直接聞くことができた。人数が多いように思っていたが、2年半という月日も有り、皆冷静で、多方面の内容となり、心に残るお話ばかり。

一方、地域の会でのこれまでにでも出されていた内容が多くあり、こういう会話を明日の生活に生かしていく難しさもあらためて感じた。

〈委員〉

事故発生時の体験談を聞き、改めて情報伝達の重要性を感じた。我々はそこから何を学び取らねばならないのか。当地においても、いざという時には、今後想定される多くの避難訓練はマニュアル一辺倒ではなく、どういう行動をとったらよいか常日頃一人一人が考えておかねばならない実感を十分得た。

〈委員〉

- 1 原子力災害時の避難情報・避難方法・避難場所が欠落していて、個人の判断で避難した状況が改めて確認できた。
- 2 2年半の時間の経過を経ても尚、個人の生活再建が進まない現状が多く語られた。
- 3 帰還については、個人により状況は違うが、時間経過に伴い帰らない人が増えているように聞き取れた。
- 4 周辺市町村住民からは、子どもへの放射能影響を心配する人が多かった。個人的結論としては、柏崎においても事前に避難方法・生活保障・継続影響調査など国と取り決めをしておくべきだと思う。

〈委員〉

自治体も住民も情報が全く無い中で右往左往しなければならなかった生の声を聞き、本当につらい思いをした当時の様子を想像した。そして、それが今も続いている苦悩を感じ取れた。除染であれ賠償であれ未解決の問題が多くあり、そのことで家族バラバラの生活を余儀なくされている。本当に言葉のかけようがなかった。

〈委員〉

- 1、事故後直後の情報連絡が体制がまったく無かった。地元自治体、県もまったく防災対策は機能していなかった。
ずっと流浪の民のように次つぎと避難所を移動させられた。多額のお金をつぎ込んだスピーディを使わなかったのでは無く使おうとしなかったと思う。
- 2、賠償については、今まで住んでいたうちの補償が家と土地で70万円の評価にしかないと聞いた。これで生活再建などできるわけが無い。住宅は基本的には再取得できる保障額とすべきである。
- 3、柏崎刈羽原発の再稼働の準備行われる中で前記のような状態のままでは周辺住民は納得できないのではないかと。柏崎刈羽住民が納得できる防災計画がつけられ、事故時の賠償も生活再建の保障できるものでなければならない。

〈委員〉

福島 of 被災者の方から柏崎、刈羽の住民に対して貴重な忠告があった。「事故が起こる前にあらかじめ自分の避難先や避難方法を考えておくべきだ」と教えられ、改めて故郷を捨てて逃げなければならない原発事故の深刻さを自分の事として実感させられた。

また、事故の収束と被災者への賠償は東京電力だけの手に負えない。最大の責任は、国策として原発を推進してきた政府にあるのだから、政府は東京電力と共にその解決に最優先で取り組むべきだと思った。柏崎、刈羽で福島の二の舞を演じてはならないと思った。

〈委員〉

Bグループでは、被災された方4名を含む10名で事故発生時の状況をお聞きしました。情報不足が着の身着のままの避難生活を余儀なくされたのでは？防災無線があっても届かない場所もあり、ヨウ素剤配布も初期には間に合わず。混乱していた当時を話されました。

2年半経過して思うことは、‘子どもたちが栄えるまち’にしたいと母親の立場での発言がありました。私達も立地地域で生活している住民として何が重要なのか判断が出来るよう思考を止めずにとっております。

〈委員〉

- ・避難方法の指示がほとんど無く着の身着のまま避難した。又、避難後の発電所・汚染状況の情報が全く無かったとのこと。

柏崎刈羽では、福島の反省をふまえ、避難訓練の充実と共に事業者・各自治体の住民避難が臨機応変に対応できるソフトの徹底した見直しが必要ではないか。

- ・高汚染地域の住民の中には、家族と共に暮らせれば帰れなくても良いとの意見があった。

行政は、コストと保証を比較して、一刻も早く決断し、避難民が今後向かう方向の援助をすべき。

〈委員〉

福島県の地元の方と実際お会いしてお話を聞くことができ、短い時間であったが、有意義であったと思う。

ある方が、『自分の判断で避難した』とお話しされたが、これははたして正しい行動なのか疑問が残った。自分の判断を尊重することは悪いとは言いませんが、避難計画を無視する行動なのかもしれないと感じた。ただ当時は誰も信用できないという気持ちもわからなくもない。

自分は防災計画どおりに避難できるだろうか。もしかしたら、自分たちさえよければという行動に動くかもしれない。だからこそ、住民が納得できる防災計画の構築とそれを周知し、万が一の事態に備えることが大事なのではないかと感じました。

〈委員〉

震災直後の状況について。

情報が全く無い状況で結果として放射線量の高い地域に避難した住民が多数いた。

情報の開示があれば風下に避難することがなかったのではないか。被災

時の的確な情報の大切さを痛感した。

避難時になにを持って避難すべきか日頃より考えておく必要性を感じた。

移動時ガソリン不足で移動できない者が多くいた。普段より満タンにしておく必要性をあらためて認識する。

線量の高い地域から避難されている人の意見として、自分は戻るつもりはない、線量の高い地域の除染はやめて中間貯蔵施設にすべきでないか、その除染費用を住民の補償にまわすべきとの意見があった。

〈委員〉

3/11 直後の状況を伺い、愕然とする内容が多かった。3 名の方が口を揃えて何度も言っていた事が「情報が全くなかった。複合災害で、中でも原発災害では正しい情報を隠さず全て欲しい。最後は個人（自分）の判断で行動、避難しなくてはならない。」

子育て中の若いお母さんの発言も重いものが多かった。「絶望の淵に立たされた。高線量の中、始業式、入学式が行われ、不安な事を学校、行政に届けると情報をコントロールされ、正しい事が伝わらない…」等、深刻な内容。

大熊町の方は、避難した体育館で断られた。又、ヨウ素剤があるにもかかわらず、申し出ても配布されなかった。スピーディによる情報は、県に届いても住民には届かない。首長の判断は、住民の安全を考える人でなくてはダメ。「与えられた情報はダメ、つかみとる情報」 牛に白い斑点が出たり、自然界（葉の変形、ハチ、ネズミ大量発生、鳥がいらない）の変り様、放射線の影響を感じている。行政は除染して帰宅と言うが、被曝した土地に戻らない、ただ家族と一緒に住みたい。

今、言える事は、○避難場所を決めておく（遠い所）○放射能の危険性を考え早く避難する（風向に直角に早く）○地域コミュニティが大切○教育現場（学校等）に子どもがいる時の避難場所 etc を決めておく○出来るだけ遠く（京都）へ、風向等考えて。時にはシェルターも必要○原発が起こる事を前提に考えていないとダメ○放射線影響の経年経過を、研究者を管理地域に入れて欲しい（現在は入れない）○電力の都合の良い情報しか流れていないので、第三者委員会が必要

〈委員〉

被災者の皆さんの被災当時の思い、今思うことの発言はどれも沈痛な経験をされ、それは今もなお続いている、その時を共有した被災者のみなさんに共通で無念な率直な発言であったと思います。多くの住民は不安とストレスの中で暮らさざるを得ない。

地域は距離で分断され、放射線量で分断され、賠償で分断され、津波被害と原発被災との対応の違いでも分断されている。県民の中に軋轢と対立が起きているとのこと。

とりわけ子育て世代の発言は重いものがありました。その原動力は子供の未来を守りたい、子供を原発事故の被ばくから守りたいという子どもを持つ親の不安な気持ちから出ているのではないのでしょうか。これから一生かけて、安心して住み、子育てができる福島を取り戻したいという強いメッセージをしっかりと受け止めました。

【 福島原子力発電所視察について 】

〈委員〉

①大変な状況の中、福島第一原発を見学できたことについて、東京電力をはじめとする関係各位に感謝を申し上げます。免震重要棟の対策本部まで入れてもらえたことは驚愕でした。まだ地震・津波被害の爪痕が至る所で見られる中で作業員の方々が働いている姿に深い感銘を受けた。一日も早い収束を切望する。

②福島第二原発は敷地面積もプラントの大きさもコンパクトに感じた。

〈委員〉

テレビや写真で断片的に見ていた現場の全体を見ることができた。

1Fと2Fでは、労働環境も空気感もまったく違い、原子力災害の大変さが伝わった。

国民への情報として、やはり、国全体のこととして福島全体像を示しながら、それぞれの課題の位置づけや、短期・中期・長期と分けてきちんと説明をする必要性と、事の重大さを再認識させられた。

〈委員〉

1F、2Fとも我々の視察に対し、一生懸命丁寧に対応していただいたと思う。

現場でも常日頃厳しい報道を毎日聞いていると思うが、起きた事故は元に戻せない。

今自分は何のために仕事をしているのか見失うことなく、先を見据えて頑張ってほしい。

微力ではあるが、柏崎刈羽原子力発電所の再稼働に際しては重大事故を起こさないよう、一市民として助言していきたいと思う。

〈委員〉

福島第一 以前の発電所を見ているだけに、事態の深刻さをひしひしと感じた。普通に暮らせる地域のすぐ隣に、無人の街がある異常さは被災者の事を考えると思わず目頭が熱くなる。発電所内で淡々と進む作業の様子は事故収束への唯一の希望だ。願わくば大過無く目標を達成されることを願う。また是非、食事や宿泊など東電社員・作業従事者の環境の改善も急いでほしい。

福島第二 はじめて見学したが、予想以上に震災の影響が見えず第一との違いに唖然とした。被災状況の説明で、まさに紙一重の状況をお聞きし、改めて神のみぞ知る災害の非情さ、怖さを感じた。

〈委員〉

見えない放射能の脅威を、委員から借りたポケット線量計で実感できた。出発時、Lo（下限値以下）だったのが、第一原発サイト内の1～4号機を通過している時にHi（上限値以上計測不能）となった。また、津波の爪跡が残っているのを見て愕然とした。車両が、機器や配管が、そして大きな油

タンクがそっくり動いていたのである。経験したことのない、見たことのない風景が印象的だった。

〈委員〉

1、J ビレッジから福島第 1 へ向かう途中国道 6 号線沿線の富岡町や大熊町で立派な住宅が無人のまだ続いていた。田んぼには所々に除染した黒い大きなビニール袋が積み上げられていた。遠くで復興、復興と聞くと順調に進んでいるのかと思ってしまうが依然として無人の街なのである。

住宅の持ち主にとっては、目の前に存在する「我が家」が我が家で無い辛い思いをしておける毎日を仮設住宅で過ごしているのだろう。

原発事故とは、こうも広範囲に多くの人たちを苦しみのどん底に陥れるのだということを再認識した。

2、福島第 1 では、事故収束に向けた対応が続けられていた。まだ車の残骸などが当時のままにしてあるところがあり、4 号機では建屋の爆発した痕跡が残っていた。放射線のレベルも 4 号機下で 1.2m シーベルト、3 号機タービン建屋下では 1.8m シーベルトと高線量だった。

果てしなく続くこの何も生み出さない作業に立ち向かう人達の思いはどんなだろうかと感じた。

3、福島第 2 では、廃炉か存続かで揺れている中で復旧が進められていた。所長、副所長に直接案内いただいた。柏崎の 1～5 号機と兄弟炉と言うこともありていねいに案内していただいた。

相当前に再循環ポンプの事故で 1 年以上も長期に停止したことにある 3 号機の格納容器内部や原子炉直下、また 6 階のオペレーションフロアも案内していただいた。

〈委員〉

福島第 1 原発では作業員の方々が、事故による放射能汚染のため家庭用の放射線測定器の測定範囲をはるかに超える高線量の環境の中で働いておられた。このような過酷な環境での長期間の仕事が強いられるような事故を起こす原子力発電に依存することは倫理に反することだと思った。

日本も、第 2 の過酷事故が起きる前にできるだけ早く方針転換すべきだと思った。

〈委員〉

数十年ぶりに映像だけで見ていた 1F 発電所を視察する機会をいただき貴重な体験でした。いわき市から向かう国道 6 号線から見えた景色には複雑な思いがありましたが…。

線量の高低がある現場での作業は困難続きだと思いますが、収束に向かうよう願っております。

2F 発電所では、津波の傷跡は残っていましたが、1～4 号機、健在でした。1F、2F 対応していただいた電力の皆様に感謝です。ありがとうございました。

〈委員〉

- ・同じ津波被害の中で、福島第 1 と第 2 の状況の違いは、電源喪失にあるとのこと。柏崎刈羽ではそれをふまえ、電源喪失にならぬように再度見直し、万全の対処を願う。

- ・第1では24時間体制でがんばっている。トラブルがなくなるように安全面・健康面のサポートを十分に実施してほしい。

〈委員〉

事故の被害はある程度テレビで見ている映像と変わりはないのでそんなに驚きは感じなかった。しかしテレビには映らない放射線と戦っている作業員をそこでは見ることができた。本当に望んで仕事をされているのだろうか。こんな仕事誰のためにやっているのだろうか。そんな気持ちにさえ感じた。

最近、1Fではご存じのとおり、トラブルが続いている。そのたびに東電をバッシングするマスコミや世論。

それでも放射線と戦っている作業員がそこにはいる。

そこにいる作業員には非はあるのだろうか。

がんばろう福島。東京電力。文句を言ったってしょうがない。一刻でも早く福島の方が帰れるよう自分に何ができるのかを感じる機会となった。

〈委員〉

福島第一原子力発電所では社員の皆さんが一生懸命働いている姿と、施設の壁に貼られていた子どもさんたちの多くの応援と感謝の手紙に感動しました。

事故となった事業者の責任はあるが、そこで昼夜作業している社員には全国民で応援するべきでないかと感じた。

福島第二原子力発電所は建屋に浸水はしたものの電源喪失がなく重大な事故に至らなかった事実と、電気を発電する施設が電気を一番重要とすることに電気の重要性をあらためて感じる。柏崎刈羽原子力発電所も教訓を生かしより以上の安全性を求めてほしい。

〈委員〉

個人的には東日本大震災による運転停止以来2回目の福島第一・第二原子力発電所の視察となった。前回は昨年10月。それから1年の間に福島第一では様々な曲折があったことは周知の通りであるが、その間、報道含め世間の強い風当たりの中で一貫して高い士気を保ち続けながら作業にあたってきた現場作業員の方々に心から敬意を表したい。度重なるトラブルがあったとしてもその中で少しずつ状況は良い方向に進んでいると認識している。

この地域の会の委員は、柏崎刈羽原子力発電所の運転についての立場はそれぞれであるものの、こと福島第一原子力発電所のこれからに対しては全く同じ願いを持っていると認識している。当会委員全員の思いとして現場で作業される方々の安全と一日も早く事態が安定し、収束したといえる日が来るように、作業員の方々を応援したい。

福島第二発電所では昨年の時点から一層復旧が進み、今年5月には全号機の本設復旧が完了したとのことで安定した状況になったことは本当に喜ばしい。今後は福島第一とはまた違ったゴールを目指して行くことになると思うがまだまだ先は長いと感じている。が、このプラントが従来予測をはるかに上回る震災と津波という大災害を経験して、復旧したという事実は大変大きな事実だと考える。

原子力発電をとりまく周囲の環境がいまだ流動的である状況の中ではあるがこの先の目標をぶれることなくしっかりと定めて第一発電所と同様に高い士気を保ち続けて頂きたいと思っている。

所要により福島入りが遅れ、いわき市に避難されている方々からお話をじかに聞くことができなかったことは非常に残念だった。今後機会があれば是非本音を聞いてみたいと思っている。

〈委員〉

福島第一原発の現況の説明を受けてバスで建屋へ向かった。

3号機の海側を通った時は声をのむ…と表現しても当てはまらない。巨大な建物が爆発のままの状況を呈している。1号機、4号機は一応、カバーされている。がまだ外側には、津波による残骸がそのままである。

この光景は、言葉では表現出来ない。

そこで作業されている人々が心配である。防護服を着ているとは言え、長時間の作業はどう考えても困難と思える。健康管理もとても心配である。

放射線の危険性をあらためて学習する必要もあり、若い人たち、子どもたちも学ぶ必要があると思う。

原発災害の収束を願うと共に、まだ多くの問題がある事もわかったので、今後、益々、色々な角度から考えていく必要性を感じた視察であった。

〈委員〉

福島第一原発はひとことで言って、収束とはほど遠い、事故はまさに進行形の真ただ中にあると言うことを体験しました。実際に行ってみると、収束のための施設群がひしめいている。特に汚染水タンク群の横を通った時は、タンクの大きさに驚きましたが同時に、やけに華奢な造りに思えました。だからどこからか放射能汚染水が漏れるのでしょうか。1000トンのタンクが2日半で満タンになる。2年後には敷地からあふれてしまうんじゃないか危惧を強く持ちました。東電は、海に流すことを否定していなのではないかと思います。汚染水対策は、まさに真ただ中の重大課題だと実感しました。

放射能の線量が高く、特に3号機前はマイクロバスの車内での計測でも東電の説明では1870シーベルトとのこと。4号機では今秋使用済み核燃料を取り出すことができるかどうか。東電社員の皆さんに送られてJ-ビレッジへ帰るバスの中で、柏崎の9月定例議会での市長の答弁を思い出していました。

—[市長] 原発がある限り、東電と国には事故対策と被災地の復興について最後まで重い責任をしっかりと果たしてもらいたい。—

〈委員〉

I 9. 29 いわきの会場のA班で聞いた避難者・いわき市民の発言

■富岡からの避難者・大熊からの避難者の発言

●富岡から川内までの避難道、通常20～30分だが、渋滞で2～3時間から5時間もかかった。車にガソリンを満タンにしていなかったため、燃料切れで移動できなかった。郡山市内までガソリン不足でスタンドに行列ができていた。平常時から避難路を考えておく必要がある。

●1番の加害者は東京電力、2番の加害者は国、3番目・4番目は福島県と立

地町。

- 国や県は、高線量汚染地域は、200～300年は帰れぬことをはっきりと表明すべきだ。高汚染地域に中間貯蔵施設を設けなければならない。住民の多くは帰れぬことを知っている。2年半も放置した家は再利用するにも雨漏りで腐って、修理費も莫大。帰還は困難であることをはっきりと示すべきだ。
- 高線量地域の除染は無意味。生活できる線量に戻るのに数百年。莫大な除染費用を投じるより生活再建に費用を。築100年の住宅の補償評価額はほとんどゼロ。補償金で生活再建はできない。元の生活を取り戻すには除染でない。町も環境省も業者の儲けのためにアリバイ造りの「除染」をしているだけだ。生活再建のために除染しても住めない真実を伝え、生活再建と将来のコミニティーの在り方の方針提示が必要だ。
- 除染は中通りの移住先仮設等に限定して実施すべきだ。限られた予算は有効に使用すべきだ。
- 国は事故直後に炉心溶融を核種分析（テクニウム？検出）で知ったため、11日夜に茨城交通のバス70台を大熊町にのみ手配した。富岡には何の連絡もなかった。
- 避難者は国の連絡がないため線量の高い地域に避難して被曝してしまった。今後情報が公開される保証があるのだろうか。
- 避難先での軋轢。会津若松での話：会津の人は質素でスーパーでの購入量は少ないが、浜通からの避難者は大量購入して、ひんしゅくを買っていると聞いた。人口30万余のいわき市には、5000人のいわき市沿岸部の津波被災者の仮設住宅やアパート入居者と25000人の原発避難者、合計3万人が流入している。交通渋滞や市民税を納めずに水道・下水道の使用することに、いわき市民からの違和感が感じられる。
- 東京電力の対応に怒り：原発立地の双葉・大熊・富岡・楡葉の4町には3人の東電社員の議員がいる。この議員が、避難先の町長等役場幹部につきっきりで、「1週間で帰宅できる」等の情報を発し、町の対策方針の邪魔をした。許せないことだ。この事実を柏崎刈羽でも知ったうえで、東電と対処して欲しい。

感想：国会事故調の立地地域からの聞き取りにも、避難所に東電関係者が誰もいなかったこと、早々と避難して地元住民が見捨てられたことが書かれていることを思い出した。

- 国も県も、原発避難民を見捨てた。富岡町は人口16000の町、その半数8000人が西隣の人口2800の川内村に避難した。川内村民は自宅から保存米を持ち寄り、炊きだしで歓迎してくれた。3月16日14時から16時に川内村役場で、川内・富岡の合同災害対策会議が開かれ、「苦しいが協力してがんばろう」と決めた。その場に福島県警も同席していた。しかし直後に国は30kmの屋内待機を決め、県警は連絡もなく引き上げた。18:30にビックパレットに川内の1200人と富岡の1800人、合計3000人が避難することを決定した。東電からも国からも県からも具体的連絡はなかった。事故があれば、原発周辺住民は見捨てられる。
- 県や市町村のモニタリングポスト（MP）周辺の除染の目的は何か。原発の敷地外には福島県が設置したモニタリングポストが多数ある。また、市町村役場の構内にもモニタリングポストがある。なぜか、モニタリングポストの周辺を除染してあたかも線量が低いように発表している。独自に測定すると、モニタリングポストの表示値より2～3倍高い値である。
- 子育て世代のいわき市民の発言

- 学校開始は連休明けだと考えていたが、放射線量が高い中で、学校の始業式が例年通りにあった。学校の始業式に併せて、避難先から戻った親子が多い。教育委員会や学校は、国が決めたことだとしか説明しない。放射能は怖くない。母親の心配を見て子供が神経質になることの方が影響が大きいと説明すると学者がキャンペーンしているために、心配の声を上げる者が少なくなった。
- 事故直後の 3.14・15・21 に放射性プルームがいわきを流れたが、連絡がないため、子供と給水車の水くみに並んでしまった。初期の被曝が今後どのようになるのか心配だ。いわき市民は戦場におかれているのに、戦争を感じていないようだ。心配を声に出す母親は全体の 1 割程度。声を上げた者に「世間体が悪いからやめよ」と非難する家族や周囲の働き掛けもある。
- 経済復興が優先して安全がないがしろにされているように感じる。
- 当初学校給食には北海道産の米を使っていたが、「食べて応援」と地産地消を、子供を使って宣伝している。例え検出限界値以下といえども、上乗せで内部被曝するのに。
- 問題提起する者を変人扱いする社会を転換しなければならない。
- 東電も国も県も正確な情報を的確に示してくれない。正確な情報を提供する第三者組織が必要。そのためには住民の関心と知識が必要である。

印象としては、3 人の紹介でそれぞれ立場の異なる人たちの話を聞くことが出来た訳だが、共通して東電や国、県や町への不信が大きいこと、私がまだまだ福島のことを甘く考えていることを実感できた。

II 10.30 いわき市～大野町・檜葉町・富岡町・大熊町～福島第一原発・福島第二原発

■ 行きの道路で放射線量と印象

事故直後に 2 回、その後数回、いわき市に行き、津波被害や放射線汚染の状況を確認していた。

地震後、今回初めていわき市以北の大野町・檜葉町・富岡町・大熊町に行った。事故前は何回か通った道路である。道路脇の郊外店や商店は檜葉以北はほとんど開いていない。

放射線量はいわき市内で屋内が $0.1 \sim 0.2 \mu\text{Sv/h}$ であるが、北に行くに従い高くなり、いわき市・大野町境で、 $1 \mu\text{Sv/h}$ 程度。大野町・檜葉町境の J ビレッジ屋外では $1.2 \sim 1.5 \mu\text{Sv/h}$ であった。6 号線の 2 F 入口付近（檜葉・富岡境界）は $1.5 \mu\text{Sv/h}$ 一般車の検問・規制所は富岡中心部の低地を過ぎた富岡消防署前で線量が $4.0 \mu\text{Sv/h}$ 前後。大熊町に入ると急上昇し、国道 6 号から 1 F に分岐する付近は $10 \mu\text{Sv/h}$ を超え、1 台の測定器は振り切れ、警報音を発した。

除染作業は檜葉町で盛んに実施中であった。20 の行政区があり、各区に 1 地点の仮集積場が設けられ、黒い 1 トンパックが大量に集められていた。

富岡町の一部でも家や宅地の除染作業が始まっていたが、ほとんどは草が繁茂している状態で、屋根瓦の一部破損も目立っていた。

秋の稲刈りが済んだ時期の視察だった。いわきから大熊町までの間の水田は南部のいわき市では稲の作付けが見られたが、北に向かってセイタカアワダチソウの黄色い花で覆われていた。檜葉町の一部の水田では稲の試験栽培や景観対策としてソバの白い花が見られた。区画整理された水田に多数の黒

い1トシパックで除染で刈り取られた植物と表土が多数積み上げられている異様な光景も確認できた。

3. 1 1の地震の被害は、中越地震・中越沖地震の震度6強や震度5の地域に比較して建物被害は軽微だと思われる。原発さえなければ復興できたのにとの印象を強く持った。

■ 1 F

免震重要棟と1Fの構内を視察した。

免震重要棟では多数の社員が24時間体制で勤務していた。

林立するタンク群や地下水汚染の海岸部をバスで通った。最大の空間線量は2号機海側で毎時1800mSvとのことであつた。

前日多核種除去装置のアルプスが試運転を再開したが22時間でダウンしたこと。その原因がタンク内の梯子保護パッキンの撤去忘れだったこと等が新聞に載っているのに、その報告はなかった。3月に装置が完成したにも関わらず満足に運転できないことは、熔融・沈殿を繰り返し62種の放射性核種を除去する汚染水対策の切り札装置が、信頼性の低いものではないかと危惧される。

作業員は重装備で屋外作業を実施していた。屋内視察だけで10μSv被曝した。バスの左側の人は20μSvの被曝だった。

汚染水の貯蔵タンクの多さ、雨水排水路の状況等を見て、応急の仮設工事が現在も継続していることを実感できた。そして、財政的に行き詰まっている東京電力に、福島第一原発の収束を行なう気力と能力、責任感があるのか、本当に不安を覚えた。

■ 2 F

我々を迎えた東電社員の数の多さに驚いた。経費節減が求められている中での関係者の多さに驚くとともに、一層の経費削減と被害者が納得する補償に東京電力の全勢力を注ぐべきだと思った。

2Fの敷地内の被害状況や津波被害の状況の説明を受けた。3. 1 1の1F・2Fの震度は6強、2007中越沖地震の柏崎刈羽原発も震度6強。大きな揺れの継続時間は、柏崎刈羽は10秒強であつたが、3. 1 1の継続時間は4分余と長い。地震のエネルギーは3. 1 1がマグニチュード9. 0に対し中越沖地震は6. 8。

揺れの大きさは同じ震度6強でも、継続時間は圧倒的に長い3. 1 1福島にも関わらず、地震被害の小ささに驚いた。福島の地震被害が小さい理由は何か思案している。

2F-3の格納容器内を視察した。

2F-3とKK-1は同時期建設の兄弟炉であると理解している。柏崎刈羽原発の原子炉建屋のひび割れの多さと比較して2F-3のひび割れの少なさを実感できた。

2Fの格納容器内の高線量地域 圧力容器直下のペデスタル内に案内された。何のために、毎時数百μSvの環境に無用の被曝を伴う一般人を案内するのか理解できなかった。線量表示は毎時0. 465?mSvとの表示であつた。この視察で20μSvの被曝をした。

10. 01の新聞には、9. 27と30に行なわれた衆議院経済産業委員会で、経産大臣が2Fの廃炉に言及していることが報じられていた。

東電資料では、2F構内の空間線量の値は0. 3~1. 0μSv/hでJビレッジ屋外の値より低かつた。

3. 1 1以前は0. 05μSv/h程度であつたこと。事故当初に比

較して少なくなったが、2年半経過した現在でも、数倍から20倍程度の線量であること。

2F構内の除染はモニタリングポストの周辺やホットスポットは草刈り等の除染をしたが大半はそのまま放置しているとのことだった。

2Fは檜葉町と富岡町にまたがって立地している。檜葉町と富岡町では除染作業が進められているので、敷地内の除染の有無、除染効果や放射能の挙動を確認した。

環境省が実施している除染の目標は、宅地と宅地から20mまでの山林を、年間1mSv未満の被曝となるように実施しているとのことであった。1日24時間、365日では8760時間であることから、年1mSvは毎時0.115μSvに相当することや福島第一事故で放出されて現在残っている核種の大半がセシウムであること、半減期が2年のセシウム134と30年のセシウム137が事故直後ではほぼ半々であり、2年半経過した現在までの減少はセシウム134の半減期の短さが寄与していることや、除染して減じられる効果は除染前の6割程度だと聞いていたので、現在毎時0.2μSv以上の場所は除染しても居住できないことを実感することができた。

原発敷地の被害も周辺の建物被害も、中越沖地震に比較して、福島被害は軽微だと思った。その原因を東京電力に確認したいと考えた。兄弟炉の1F-3と柏崎刈羽の1号を比較しているのではないだろうか。なぜ柏崎刈羽は建屋のひび割れが多数で福島第一3号は少ないのか。柏崎刈羽の地盤に欠陥がある結果がひび割れの相違になっているのではないだろうか。

福島の復旧・復興は容易でないこと、3基もの原子炉が炉心溶融する大事故の現実、原子力と自然は共存できないこと、福島の現実を踏まえて、私たちが柏崎刈羽で何をなすべきかを考えさせられる、貴重な視察であった。

●参考換算表

μSv/時	→	mSv/年	換算	備考
0.035	→	0.31		柏崎の平常値
0.05	→	0.44		2Fの事故前の値
0.1	→	0.87		
0.115	→	1.00		年間1mSvの時間当りのμSv
0.2	→	1.75		
1.0	→	8.76		
2.0	→	17.5		
5.0	→	43.8		
10.0	→	87.6		